

不折氏 片談

中村不折氏談

不折氏三月四日を以て歸朝せらるる七日中根岸の邸を訪ふて幸に面語を得たり。座に長尾黙氏あり、既に巴里土産の名畫を展して種々の説明中なりき。傍より黙聴して之を記す、後氏が名譽の賞を得し競技會(第三卷十九號藝術家消息に記す)の談を請ふて之を筆す。後轉じて畫室に入り、その巴里遊學中に研習せられしデッサン、エスキースを示さる、傍ら縦横の談皆聽く可し然も不敏詳きに之を記せず、今其筆記したる所を、之を頭裡に記したる所と併せて茲に掲ぐ、文字の責凡て筆者に在り、大方の推讀を請ふと共に、之を氏に謝す。(丁生識)

コンクール

△巴里には美術學校がエコール・ド・ボーザール(巴里美術學校)と、ジュリヤン大學(アカデミー・ジュリヤン)と二つあります。ジュリヤン大學はジュリヤンといふ人が校長になつて居る學校で、私立學校ではありませんが、中々好い學校で、エコール・ド・ボーザールと同じ位置にあるものとしてあります。私は此ジュリヤン大學に入つて居りましたので、此二つの學校では毎年十二月頃コンクール即ち競技會を開くのです。

△此競技會は先づ初めに其準備の競争試験をするので、夫には二百人も試験を受ける。之は一日だけ、朝八時から三時頃迄一枚のエスキース(英語のスケッチですが、私はア草稿と譯してゐます)を仕上げることになつてゐます。私のプリーを得た時には、私はダンテの地獄廻りで十番でしたが、後のプリーの次を得た時は、ジャンダークで五番でした。まあかういふやうなものが題として出る。

△此競争試験は二百人許りのものが受けるのでして、その中からエスキースでつて五六十人許りに選ばれる。此選抜されたものが、月曜の朝八時から五時迄毎日筆をとつて、競技の爲に描くのです。

△二百人の競争試験の時には別に場所を定めず、ごたくに狭い所で描くのですが、愈々最後の競技會となるに、最初の競争試験で一番になつたものが、先づ第一に競技場に入つて、モデル臺を中心として四方に線が引いてある、其線の上に自分が一番好いといふ所を占領することが出来るのです。夫で一番のものが廣い場所の中に一番好いと思ふ所へ、白墨で板の間へ領分を描いて、畫架や繪具など一切の道具を擴げて、畫を描くのに十分なだけの場所を占領する。

△次に二番のものが同じやうに、一番のものだけが占領した所を除いた廣い場所の中に、自分の好いと思ふ所を十分占領する、三番四番と皆な順

次に自分の場所を占領するのです。△月曜から毎日一モデルを寫して、六日目の土曜になり、書記が出て、出来た畫にA、B、Cの順をつけ、名は書かぬのです。愈々出来上つた畫は書記の手に預ける。

△さうして審査は、校長ジュリヤンと、主任の教員、私の教師であつた、ローランズと立會の上で等級を定める。さうして月の一番末の日曜日がエスキースポジションを開く日になつてゐる。

△其結果優等になつたのは金を百法與へ又メダイヤを與へることが成規になつてゐる。夫で最優等になる資格あるものが二名ある時は二名に與へる。不幸にして一名もありません時は與へません。普通一名ですけれど、好い時は二名になることもないではありません。

△まあさういふ順序ですが、六日目決選の際の日には五六十人が四十名に減つちまふ。いづれも討死する勢で、非常の激戦です。そこで四十名の中から夫を選び、及第したものから優等と只だのものを選り出して、優等のは學校の帳簿に記載する。

△その普通のをマンシヨンと稱する、一番マンシヨン、二番マンシヨン、三番マンシヨンと順序に行くのです。

△一番マンシヨンの上をプリーと稱して、賞金とメダイヤを與へる。一番マンシヨン、二番マンシヨン、三番マンシヨンを稱してプリーの次といふ。次位の資格がある。プリーがなければ、其中から列品を陳列館に於ける権利がある。

△又コンクールには以上の外に次のものがいろいろある。其次のものは賞金として五十法を與へる、百法のものがない時の事です。

ります。彫刻のエスキースを拵らへる。諸般の事が彫刻と違ひますが、大體書と同じです。

○氏のプリー及び次の作の評

△自分で自分の作の評判を吹聴するといふは可笑しな譯ですが、プリーを得たのがさきで、後にはプリーの次を得ました。

△そのプリーと次の評は雑誌に評が出てゐます。プリーの作は『大變確實に出来てゐる、色が明快である、手と足がよく出来てゐる、殊に足が確りして居る。好い出来である。氏は此アトリエに來て三年の研究であるが、實に長足の進歩で、ローランズのアトリエの屈指の弟子となつた。』次の作に就ては『復た出た。復た傑作を出した。今度の作は眞面目で、確りしてゐる。』といふ評であつた。

○巴里遊學所感

△然し校長は、私を呼んで、『君の畫は大變面白い出来だ、然し餘り眞面目過ぎはせぬか。』といふた。夫が爲かプリーになれなかつた。

△巴里に遊學したといつて、下宿屋にござろ／＼してると別にさうもないが、學校に行くこと、上には上があり、只だ仕事に恐ろしいといふことのみを感ずる許り、階級を踏むで進んで行かなければならぬと深く感ずる。

△中には巴里に遊學したといつて、朝は例の朝寢で、十時頃起きると、夫から直ぐ球突きを稽古、午後は無いが、夫で只だござろ／＼して、夜になると復た球突きをする。何にも勉強はしないで、誰かといふ人でもやつて來ると、早速飛んでつて、御案内をして御機嫌をとるといふやうな人があつて、随分困つたこともある。夫が日本に歸るとなることだといつて持つて歸つて評判される。

△勿論日本の大家氣取りで、巴里に遊んで居ても、夫が何か作をして、畫家として持つて歸つて來ると、夫でも日本のよりはすつと佳い。浮いた喝采は博しやうが、全く損する許り。

思つてゐる。△御承知の通り、佛蘭西の美術には流儀が分れて、アンプレッシュヨニストとかコロリスト調色派とか和蘭派とかが夫々盛んに行はれ、ヴァンデイなどは日本風に、驚く許り流暢な筆遣ひで、墨や黒い色を巧みに遣ふが、此様に驚くやうにして人を驚かせることゝ、道を樂しむことゝは正反對で、驚かせることは色氣で、あれはほん／＼にこなればならぬといふ良心に従はなければならぬと思ふ。

△アンプレッシュヨニストもほん／＼ならば至極結構だが、其の基礎を拵へるのが大變で、クラシックを十分確かに研究した上でやらなければならぬ、日本の今日ではアンプレッシュヨニストは到底も出来ぬ。

△丁度昔世蕉の言つた萬世不易と一時流行とがよくあてはまる。今日も行はれてゐる一定不易は考の確かな大家がやつて、他日ルキサンブルルにかけられて、多數の人の尊敬を得る。

○新聞雜誌の批評

△さうでした、茲に一つ言つて置き度いことがありました。歐米の新聞雜誌に載せられた評を日本の人がほん／＼に讀まれることです。ほん／＼に讀まれるから困る。元來新聞雜誌の評は、日本では無論怪しいが西洋でも矢張り怪しい。眞面目に描いては人が見ぬから、見させやうと思つては知つてゐるから曲筆をする。新聞雜誌では珍らしいものを紹介するから、皆な骨折つて珍らしいものを描くやうになる。

△相撲の評で例へて見ると、つまらない犢鼻褌かつぎが、相撲のとり口がちよつとよかつたり、關取を一尺も餘計に突き出したといつては、實に後世恐る可しだ、後來横綱の月柱冠は之に加へらるゝものゝやうに評さるゝ、さうして常陸山とか大砲とか見たいなえらい力士が一寸手のつき方が拙いとかいへば、非常に悪評を加へられて、もう到底も相撲はだめだ、廻向院の將來思ふ可しなごといふ騒ぎ。

△美術界の評も之と同じで、ブグロとかローランズとか毎年悪評のみで迎へられ年々退歩許りである、實に驚く可きものだ、早く引込め、引込めば美術界に大なる幸だ、いやブグロは俗氣紛々だ、到底もたまらぬなご、實に酷い事をいふ。